

マルクス経済学批判の方法的前提について

真 田 哲 也

第一節 経済的カテゴリー批判構想の含意

マルクス経済学批判の方法の核心は、「経済的カテゴリー批判」の方法として把握される。「さしあたり、問題となる仕事は、経済的諸カテゴリーの批判(Kritik der oekonomischen Kategorien)だ。あるいは、ブルジョア経済の体系的批判的叙述といってもよい。それは、体系の叙述であると同時に、叙述による体系の批判でもある」(一八五八年二月二二日、ラッサールあてのマルクスの手紙 MEW Bd. 29, S. 550)⁽¹⁾。古典派やブルードンの無批判的方法に對置してマルクスは自己獨特の方法を「経済的諸カテゴリーの全体系の一般的批判」(MEW Bd. 26—3, S. 250)として特徴づけたのであり、した

がってその含意を把握することがマルクス方法論研究の大前提といえる⁽²⁾。その際、マルクスが批判対象たる「ブルジョア経済的カテゴリー」をもって「客観的(客体的)思考物諸形態(Objektive Gedankenformen)」としてその特有の性格を規定した点が留意されねばならない。「このような諸形態こそはまさにブルジョア経済的諸カテゴリーをなしている。それらの形態こそは、商品生産の、生産關係についての社会的に認められた、それゆえ客観的(客体的)思考物諸形態(Objektive Gedankenformen)なのである」(K. I, S. 90)。マルクスが経済的カテゴリーに与えたこの規定の意味を明確化することは「経済的カテゴリー批判」というマルクス固有の方法の解明に不可欠である。この語義の理解に關して予め論

点を示しておけば、意味内容は二重に問題となる。第一に objektive の意味、第二に Gedankenformen の意味である。マルクスの方法論研究の核心も詰るところこの点の理解にかかっていると、いってよい。マルクスの理論において「思考物 (Gedanken)」とは決して自明のものではなく、『ドイツ・イデオロギー』執筆以来、近代市民社会批判の理論構築において独自に批判的な意味づけがなされてきた。詳細は次節以下で述べるが、それはマルクスの「経済的カテゴリー批判」構想の背後におけるもう一段深い方法的前提ともいべきものであり、「思考物 (Gedanken)」ないし「カテゴリー (Kategorie)」一般の、近代における独特なあり方 (カテゴリーの形態性) への批判的了解といえる。それを仮に思考物・カテゴリー批判のレベルと呼ぶならば、「経済的カテゴリー批判」の方法はそのレベルから基礎づけられてはじめて成立するものなのである。従来、主に経済学者の間でのマルクスの方法論研究においては諸カテゴリーの相互関連或いは『資本論』の叙述構成などが様々に検討され、少くない成果が生みだされてきたが、重大なことにそのいずれもが、一つの暗黙の前提を共有していた。すなわ

ち、そもそも近代において思考物・カテゴリーとは何か、経済的カテゴリーのもつ特殊性とは何か、という論点を自明視し不問に付す、この点である。同時にまた「自己関係 (sich auf sich beziehen)」(Gr. S. 400) とか「自我性 (Selbstigkeit)」(MEGA Ab. II Bd. 3, S. 86) など、常識的な経済学的術語からはみでる諸概念については無視されるか、派生的言及がなされるにとどまってきた。マルクスの前経済学的な側面は事実上切り捨てられてきたといえよう。このことは経済的カテゴリーの批判ということの方法的含意が、したがってまた一般に近代におけるカテゴリーの問題性を問うことの意義が、留意されてこなかった事情と照応している。他方、哲学・社会学者の間ではマルクスの方法論の重要な特質として物象化という事態を概念化した点がつとに注目されてきた。しかし、物象化という事態と経済的カテゴリーの諸規定との内的統一の関連は追究されず、各々の文脈で多義的な解釈がなされてきた。このようなアプローチにおいては個々の経済的諸カテゴリーたとえば商品、貨幣、資本の概念規定に即しつつ、それらの区別と連関において物象化構造が論じられず、物象化は各々の規定性とは無関

心な等質的な現象として括られがちであった。

これら、従来のマルクス方法論研究に共通するのは、マルクス「思考物・カテゴリー」論の、また「経済的カテゴリー」論の不在である。「経済的カテゴリーの批判」というマルクス固有の方法の解明は、カテゴリー論レベルの深みから問題をたててこそ可能であり、そのことによってはじめ、後述するように物象化という事態も経済的カテゴリー批判の方法の論理必然的な帰結として概念的に了解されるはずである。本稿の目的は、経済学批判の方法を最深部から根拠づけるカテゴリー批判の論理を抉摘しつつ、経済的カテゴリーのとする特殊な存在様式たる物象化の基本構造を粗描する点にある。

第二節 マルクスの「思考物・カテゴリー」論

マルクスの「思考物・カテゴリー」論を解く鍵は「関係」論にある。マルクスによれば「関係行為」(Verhalten)とは人間固有の特性であり、関係行為しあう諸主体と区別された「関係それ自体」(Verhältnis als Verhältnis)は人間にとつてのみ存在するものと把握される。「動物は対自的には」(für sich)他者とは関係しない、

何ものとも関係しないし、そもそも関係しない。動物にとって他者との関係は関係としては (als Verhältnis) 存在しない」(D. S. 28)。マルクスはここで関係行為における「対自的」という契機と「関係として」の契機の二つを区別している。前者については次節で詳述するので、まず関係の「関係として」の存在という契機から検討していきたい。その際、関係行為しあう諸主体とは区別されて関係がそれ自体として確定されるのは思考 (Denken) によってのみ可能であると捉えられる点が注目される。

たとえば、マルクスは商品関係を論じながらそれを敷衍しつつ、より一般的に関係について次のように言及している。「両者(商品—筆者注)とは異なったこの第三者はある一つの関係を表現しているから、さしあたり頭腦の中に表象の中に存在する。ちょうど、諸関係が一般に、関係しあう諸主体との区別において確定されなければならぬとき、思考 (denken) されうるにすぎないように」(Gr. S. 77f.)。また他方でマルクスは次のようにも指摘する。「すべての関係は、言語においてただ概念としてのみ表現されうる」(『ドイツ・イデオロギー』MEW Bd. 3 S. 347)。

これらの所述を概括するならば、諸主体とは相対的に区別された関係、それ自体は、思考（活動）によって把握されると共に、概念など一定の思考物によって表現されるものである、ということができよう。そして「思考物（Gedanken）」とは、マルクスにとっては概念、理念、カテゴリーなど諸個人の観念的な表現の総体を意味しているといえる。⁽⁵⁾ マルクスの「関係」論のかかる確認は「関係の自立化」と呼ばれる構造の解明にとって、重要な橋頭堡構築となる。すなわち「関係の自立化」という事態の内には既に「思考の自立化」という契機が内包されているのである。「哲学者たちにとって最も困難な課題の一つは思考物（Gedanken）の世界から現実の世界へ降りてくることである。思考物の直接的現実態は言語である。哲学者たちは思考（Denken）を自立化、させないように、言語をも一つの固有の領域にまで自立化させないではおかなかつた。……われわれは思考物と理念の自立化は、諸個人の人格的関連と関係の自立化の一帰結であることを示した」（a. a. O., S. 432）。「これらの諸々の普遍性（Allgemeinheit）及び諸概念（Begriffe）が、神秘的な諸力として通用する、ということは、実在的諸関係

の自立化の必然的帰結であり、それらはその帰結の表現である」（a. a. O., S. 347）。関係の自立化は、思考物の自立化として表現され、それはまた言語の自立化とも不可分の事態と把握されるのである。⁽⁶⁾ さらに、関係の自立化はその担い手たる諸個人の意識において理念など思考物の支配として、抽象の支配として、現れてくる。

「すなわち、以前は諸個人は相互に依存しあっていたが、今や抽象によって支配されている……諸関係のそうした支配は、諸個人自身の意識の中では理念の支配として現象する……」（Gr. S. 96f.）。諸個人から自立した関係は、人間の関係であることには変わらないのだから、宙に浮いたものではありえず、したがって諸個人に担われてのみ実在化される。諸個人から自立した関係が、再び諸個人において現象してくる局面が問題となる所以である。

こうして諸個人からの関係の自立化という事態は次のような諸局面を持つひと続きの過程といえる。①諸個人 ↓ ② 関係の自立化 ⇨ 思考物の自立化 ↓ ③ 諸個人の意識における思考物の支配（或いは思考物・カテゴリーの人格化⁽⁷⁾）。その際、諸個人から関係が自立化して思考物・カテゴリーとして存在している条件の下では、この自立

化したカテゴリーを抽出することが、諸個人が相互に関係し合い関係を実在化するための不可欠の契機となる。

たとえば、商品関係において、諸個人は無意識的ではあれ「価値抽象」「価値還元」を介して他者と関係を取り結ぶのであり、価値カテゴリーが諸個人を媒介する内的紐帯となっているのである。しかも、このような諸個人の関係のあり方は市民社会では商品関係にとどまらない一般的な構造的特質となっている。その根拠は、第一に近代市民社会においては諸個人において普遍的諸関係が成立し普遍性の圏域が形成される点にある。「(市民社会は―筆者注)それまでの内で最も発展した社会的な(この立場からみて普遍的な)諸関係の時代なのである」(Gr. S. 22)。しかも、所述のように思考物ないしカテゴリーは諸個人間の関係を表現するものであったから、普遍的諸関係は普遍的カテゴリーにおいて表現される。カテゴリーが普遍的なものとなるのであり、単に個々のカテゴリーが抽象されてくるのではなく、普遍的カテゴリーが抽象されてくるのである。カテゴリー一般が一つの問題性として登場してくる。第二に、市民社会において「普遍的関係||普遍的抽象」が成立する過程は同

時に、「種々の形態の社会的諸関係が……外的必然として、個々人に対立する」(p. 10)過程であり、関係の自立化過程でもある。普遍的諸関係の成立とは、諸個人から自立した普遍性の領域の形成を意味しており、同時に普遍的カテゴリーの支配化過程でもあるといえる。こうして、「社会的関係が諸個人に対立」し自立化する事態それ自身が普遍的なものとなるのであり、それは諸個人においては普遍的抽象の支配、抽象の普遍的支配として立ち現れてくる。したがって、一般に近代市民社会において諸個人はカテゴリー・理念などの諸抽象を介して他者と関係を取り結ばざるをえない、ということが出来る。ここでは「思考物」は単に関係を表現するだけではなく、それ自体が一つの機能的意義を持つようになる。諸カテゴリー、諸理念が諸個人を繋ぐ媒辞となるのであり、諸個人は「思考物」という「回り道」(Umweg)をして他者と係わることになる。それら思考物は、現実の具体的な諸個人とその多様な諸関係を抽象化して表現し、同時にそのことでまた一つの普遍性を表現するといえる。諸個人はいったん思考によって抽象化||普遍化をくぐり抜け、その上で他者と一定の関係を結び合うのである。そ

のときこの媒介物たる思考物・カテゴリーは包摂者として、「神秘的な諸力」を持ち諸個人の意識を支配するに至る。マルクスのカテゴリー批判とは、まさにこのような近代におけるカテゴリーの普遍的自立化とその諸個人に対する支配を批判するものにほかならない。そしてそのような一般の批判が要請されたのは、客観的事態そのものの内に根拠をもっていたのである。

こうして、カテゴリー・理念 (Idee) など思考物は近代市民社会において単に人間の諸関係を表現する意義をもつだけでなく、諸個人の媒介者という独自の普遍的機能を果たすようになる。したがって市民社会への批判はこのような思考物の自立的機能様式への批判として展開されること⁽¹⁾が不可避となる。しかもその思考物は市民社会的圏域の構成員の意識を支配することでその媒介機能を果たすのだから、思考物批判とは思考物によって意識を支配される市民的個人のあり方への批判であると同時に自己を思考物によって媒介しようとする市民的主体のあり方への批判を含蓄している(この点は次節参照)。

この独自の機能性、形態性に着目するとき諸カテゴリーは市民社会的主体の「定在諸形態 (Daseinformen)」

(Gr. S. 41) と言いうる。カテゴリー・思考物の形態性の意義を明確にすることはまさに近代市民社会批判の理論構築の不可欠の前提をなすのである。言い換えれば、ブルジョア社会を批判しようとするものにとって、初発において最初の躓きの石となるのが、このような近代における思考物・カテゴリーの独特のあり方なのである。

その扱いにおいて明確な方法態度が貫かれずには、市民社会に対する学的な批判は完遂されえない。青年ヘゲル派・ブルードンなどの論争において、マルクスはそれらイデオログ自身の躓き、すなわち思考物が支配している⁽²⁾と錯視せざるをえない彼ら自身の転倒性をその客観的根拠と必然性において説明することで論駁した。彼らはそれなりに市民社会批判を目指したにもかかわらず、分業による関係の自立化→思考物の自立化・転倒意識の発生という客観的な事態、思考物が諸個人の内的紐帯としてその意識を支配せざるをえない事態を把握することができなかった。「すべてのブルジョア的生産形態を結びつけている紐帯を彼(ブルードン)は把握していない」(アンネンコフあてのマルクスの手紙、一八四六年一月二二日 MEW, Bd. 4, S. 552)。その結果、イデオロー

グはみずからそのブルジョアの転倒構造の担い手に墮していく。「ブルードン氏は、ブルジョアの生活は彼にとって永遠の真理である、と直接に断言してはいない。彼はブルジョアの諸関係を思考物の形態で表現する諸カテゴリーを神化することによって、間接的にそれを言うのである」(a. a. O. S. 52)⁽¹²⁾。関係の自立化≡思考物の自立化過程は、自立した関係の担い手にとっては無意識的、自然発生的過程であり自己の担う当の過程が転倒であることを自覚できない。そればかりか担い手の頭脳にはその過程を反映した転倒的意識さえ生じ、ついには自らそれを「理論化」してはばからない。たとえばドイツ・イデオログは「一連の人格……イデオログ」を「歴史の製造者として……捉え」「『概念』の代表者、生産者……こそが昔から歴史を支配してきたのだという結論に至る」(D. S. 7)。「ブルードン氏にとっては、……諸抽象、諸カテゴリーが第一原因なのである」(MEW Bd. 4. S. 52f.)。思考物の市民社会的転倒に対する無批判性は転倒的意識の「理論化」に帰着せざるをえないのである。マルクスは関係の自立化という客観的な転倒のメカニズムを解き明すことを通して、その事態が自立化

構造の担い手には自覚化されず、むしろ神秘化されるといふ倒錯をあわせて批判したのであった。このようにイデオログとの論争を介してマルクスは単に彼等の歴史・社会論の観念論の本質を暴き出すだけでなく、むしろ、観念的な思考物が彼らの意識を支配してしまっているというイデオログにおける当の事態それ自身が関係の自立化の帰結であること、それが分業の存在という歴史的諸条件に規定された事態であること、を説明していくのである。マルクスのイデオログ批判は市民社会への構造的批判と重ね合わされることで、単なる時論的意義を越えた市民社会解剖の戦略的意義をもつものとして位置づけられるのである。

このようにマルクスが市民社会批判遂行にあたって方法上第一に直面した課題は関係の自立化の批判であり、これがマルクス固有のカテゴリー・思考物批判のレベルにはかならない。それは最終的には経済的カテゴリー批判へと貫徹されるべきものではあるが、同時に近代におけるこのような思考物・カテゴリー一般のあり方についての批判的解なくしては近代における経済的思考物・経済的カテゴリーの学的批判も不可能となる。経済的思

考物も思考物であり、市民社会の普遍的転倒性から免がれうるものではないのである。カテゴリー一般が諸個人の関係を表現するように、経済的カテゴリーは諸個人の経済的關係を表現するものであり、その点においては経済的カテゴリーはカテゴリー一般と同一のものである。が同時にまた経済的關係が質料転換(物的代謝)という契機を不分離に随伴する關係として關係一般に解消されないように、経済的關係の表現である経済的カテゴリーは質料的モメントを不分離に伴うカテゴリーと定義する。この点こそ、経済的カテゴリーが他のカテゴリーとは決定的に区別される点であり、また後述するように獨特の存在様式をもつ点でもある。ここから、單に關係の自立化構造の批判には還元することのできない近代における経済的カテゴリーの存在構造という独自の課題が生じてくる。マルクスの「経済的カテゴリー批判」とはまさにかかる課題に応えたものにほかならない。が、次節ではなおそのまゝに關係の自立化構造のもう一つの重要な側面について検討することとしたい。

第三節 マルクスの「自己關係」概念

カテゴリーの自立化は、同時に他方で「自己關係」の自立化という事態を相即的に伴っている。カテゴリーの自立化は諸個人における「自己關係」という契機を不可分の媒介としてのみ可能となる固有の構造をもっている。この「自己關係」概念はマルクスの諸文献に散見されるものであるが、決して詳説されてはいず、そのため従来十分に注目されてはこなかった。しかし、この概念はマルクスの理論構想を背後から支える基本カテゴリーであり、この概念の把握なしにマルクスの方法の正確な理解は不可能であるといえる。マルクスは「自己關係」が商品關係の展開と共に独立化していく過程を述べる。「人間は、歴史的過程を通じてはじめて個別化される。……交換自体はこの個別化の主要な手段である。交換は群居生活を無用化しそれを解体する。しかし、人間は個別化されたものとして、單に自己だけにのみ關係する。(sich auf sich beziehen) というように事態が一変すると、個別化されたものとして自己を措定するための手段は人間の自己普遍化活動、自己共同化活動(sich Allgemein- und Gemeinmachen)となつてしまふ。」(Gr. S. 399f.)。ここには、商品關係による本源的な諸共同体の

解体と共に自己関係が自立化して行くことが明瞭に描かれている。商品関係の展開はその関係それ自体を必然的に貨幣に結晶化させていく過程であるのだから、自己関係の自立化過程は、同時に他方で諸個人の関係それ自体が自立化していく過程でもあるということが出来る。しかもマルクスによればその過程は諸個人が独立した個人へと「個別化される」過程でもあり、「個別化されたもの」として諸個人はかかる「自己関係」を媒介として「自己共同化・自己普遍化」していくものと把握されるのである。また、同一の事態が逆に関係の自立化の局面から次のように捉えられる。「一八世紀に『市民社会』ではじめて、種々の社会的関連は、外的必然として、個人に対立するようになる。だが、このような立場、個別化された個人々の立場を生み出す時代こそ、まさにそれまでのうちで最も発展した社会的な（この立場からみて普遍的な）諸関係の時代なのである。」(G. r. S. 22)。一方で「個別化された個人」の登場は、他方で、諸個人に対立した社会的諸関係の成立、普遍性の圏域の形成を前提としており、両者の確立は不可分離のものと把握されている。その上、先程みたように「個別化された個人」

の出現は「自己関係」の自立化を同時に含意していたのだから、この点からも一方で社会的諸関係の自立化と他方で「自己関係」の自立化は、相即的な同一の事態であり、それぞれ相対的に独立した契機を表現するものということが出来る。

ところで、前節でみたように関係それ自体はカテゴリー・思考物などで観念的に (ideal) 表現され、諸個人の頭脳に反映されるものであったから、「自己関係」とは、関係それ自体即ちカテゴリー、理念などの思考物に自己を関係づけることと解することができる。⁽¹³⁾ このような、自己関係と理念との密接な関連について、マルクスは青年ヘーゲル派を批判しながら次のようなコメントを加えている。「哲学者たちにとっての関係≡理念。彼らは『人間』の自己自身への関係 (das Verhältnis des Menschen zu sich selbst) しか知らないのであらゆる現実的諸関係が、彼らにあっては諸理念になる」(D. S. 150. MEW Bd. 3, S. 63)。ここでマルクスは「哲学者たち」イデオログが「自己自身に対する関係しか知らない」ために、換言すれば「現実的諸関係」と「自己関係」とを区別できないがために、自己関係することを

もって現実に關係することと錯視し、その結果「現実的諸關係が彼らにあっては諸理念になる」と批判している。このような批判論理の背後には、現実の關係を自己關係に還元することと、現実の關係を理念に還元することとを、同一の事柄であるとする理解を見出すことができる。つまり、後者は關係の自立化の帰結である理念の自立化、諸個人の意識における理念の支配という前述の事態を指している。それに対し、前者は現実的關係からの自己關係の自立化として捉えうる。この注釈の中に、理念の自立化は他方で相補的な契機として自己關係の自立化を前提とすることが示唆されているのである。

その際「私の環境に対する私の關係が私の意識である」(D. S. 28, MEW Bd. 3, S. 31)という命題を想起するならば、「自己關係」とは、「自己意識」を意味するものと解せられる。諸個人から關係が自立化し、思考物が支配する近代市民社会において、諸個人は自己意識的なあり方を介して、諸理念、諸カテゴリーに自己を關係づけ、またそれを通じて自立化した諸關係を担っているのである。カテゴリー等の諸思考物は諸個人からは相對的に独立して、一つの自立した共同性、普遍性として

存立しているわけで、そこへ自己を關係づけることをマルクスは「自己普遍化」、「自己共同化」と呼ぶのである。自己意識の自立化は、このような一連なりの事態を包蔵している。自己意識を媒介として自己を普遍化してゆく諸個人のあり方、ここにマルクスの近代的人格把握の基本点を見出すことができる^(註)。このように、カテゴリー・理念などの思考物と自己意識とは相互制約的な連関の内にある。前者が諸個人から区別された自立化した關係の客觀的契機とすれば、後者はそれを担う際の諸個人の主觀的契機と捉え返すことができる。自立化した關係は、実在化するためには諸個人によって担われねばならず、その担い手たる諸個人による自立化した關係の担い方が、自己關係なのである。裏面からいえば、理念などの思考物は自己關係に介在されて実在化するのであり、またそれを通じて諸個人の意識を支配していく。關係の自立化していく構造はこのような諸契機の論理的関連において把握される。このことを批判的に解明した点こそマルクスのカテゴリー批判の中心点であり、經濟的カテゴリーの分析もこのこと^(註)の理解を踏まえてなされる。たとえば、商品と貨幣の概念的把握は、価値のカテゴリーとしての

特質と自己關係的契機の特質とを明確に規定することを前提としてはじめてなされうるのである。(第五節で詳述する。)

第四節 關係の自立化と物化

近代におけるカテゴリーの自立化という転倒的事態は、経済的カテゴリーの自立化において一段と神秘化の度を深める。本稿の冒頭で引用したようにマルクスは、近代における経済的カテゴリーの特徴を「客観(客体)的思考物諸形態 (objektive Gedankenformen)」と規定する。

「思考物 (Gedanken)」とマルクスがいうとき、既述のような近代における思考物の独特の形態——自立的なあり方——への批判的な認識が内包されていることは既に多言を要さない。問題は経済的カテゴリーの独自の質である。経済的カテゴリーもまた思考物の自立的形態の一つであるという一般的レベルでの問題に加えて、その特殊の性格は objektiv という規定によって示されている。すなわち、マルクスは objektiv という語に二重の意味を付与する。第一に生産關係が諸個人からは自立的に客観的に存立しているという意味で。第二に、その自立化

した關係が物として客体的に存在しているという意味で。すなわちここでは思考物という觀念的なものが実在的な物という形態で存在しているのである。思考物と客体的な物との一体性は「Gedankending」(K. erste A. S. 17)という語において端的に示されている。物化ないし物象化⁽¹⁵⁾とはかかる事態にはかならない。これこそ近代における経済的カテゴリー特有の存在形態であり、カテゴリーが客体的な物として存在する形態なのである。近代において経済的カテゴリーは自立化したカテゴリーであると共にカテゴリーの物化で、ここから二重の転倒性を合わせ持つことを指摘できる。

まず第一に物象化はその背後に自立化した關係の表現であるカテゴリーの支配、「抽象の支配」(Gr. S. 90)を内包している。すなわち、通説的解釈で言われているように、物象化とはたんに關係が物として存在しているというような単純な事態ではない。諸個人から關係が思考物として自立化しつつ、かつそれが物として存在しているのである。物象化という事態の内に諸個人の關係が伏在していることを指摘することは比較的容易である。しかし、そのことをもって物象化構造の解明と称するこ

とは皮相であって、それだけではむしろ反対に対質された関係そのものの持つ問題性が捨象されてしまう。物象化構造究明の核心は、隠蔽されている関係が諸個人から自立している関係であり、思考物という形態で諸個人とは独立に存在し、かつ自己関係の契機を伴う独特の構造を有すること、またそれは抽象作用・思考を介することで諸個人の意識を支配すること、これらの転倒性を認識する点にある。しかしまたその点にこそ困難もある。なぜならば人々は既に日々このような抽象を行っており、それは無意識的本能的な作用となっているからである。

「人間は、彼らの諸生産物を相互に諸商品として関係させるためには、彼らのいろいろに違った労働を抽象的な人間労働に等置することを強制されている。彼らはそれを知ってはいない。しかし、彼らは質料的な物を抽象物たる価値に還元することによって、それを行うのである。これこそは、彼らの頭脳の自然発生的な、したがってまた無意識的な本能的な作用なのである。」(K. erste A. S. 38)。

ブルジョアの思考形態は「既に社会的生活の自然形態の固定性」(K. I, S. 90)として日常的習慣となつて人々の意識をとらえているのである。

さらに物象化の第二の転倒性は、不可視的なものとして諸個人から自立的に存立している思考物が再び抽象を介さない可視的で直接的な物として存在し現象してくる点にある。関係の自立化という事態は所述のように本来は諸個人の意識において抽象の支配としてのみ現象してくるものであったが、物化という再転倒的事態によって感性的な物として存在し、現象してくるのである。ここに経済的カテゴリー特有の局面が存する。「価値関係およびそれに含まれている価値表現の中では、抽象的普遍的なものが具体的なもの、感覚的現実的なものの属性として認められるのではなく、逆に、感覚的、具体的なもの、抽象的、普遍的なものの単なる現象形態または規定された実現形態として認められるのである。」(K. erste A. S. 771)。

思考物の自立的存立という転倒があらわに示されずに、かえって物的に覆い隠されるのである。これが第二の転倒である。第一の転倒性の独自の深刻な意味が把握されてはじめて物象化の意味も了解されるのである。このような筆者の解釈は決して恣意的なものではなくマルクス自身の言明に沿うものである。「人格的依存関係との対立における物的依存関係は……いまや抽象に

よつて支配されるといふようにも現れる。だが抽象または理念は個人の上に立つ支配者たるかの物的依存関係の理論的表現にほかならない」(G. H. S. 96f.)。ここでマルクスは物化が同時に理念ないし抽象の支配を伴うことを明瞭に述べており、筆者の立論の正しさを裏付けるものである。

明確にされるべき点は、いったい物象化とは何をどのように隠すのか、という点である。たとえば、価値は物化したカテゴリであり、それは物として存在している。商品交換において諸個人は物を媒介として他者と関係し合う。現象の最表層では、物が諸個人を媒介するものとして現れ出ているのである。しかし、同時に価値は、価値カテゴリという思考物として存在しており、諸個人は商品交換において無意識的ではあれ、価値抽象を介して他者と関係しあっている。価値というカテゴリが諸個人を媒介する内的紐帯となっているのである。ところがこの価値カテゴリの自立的存立——紐帯的性格は物化することで可視的な物の自立的存在の背後に隠されることになる。思考物が自立化して諸個人を繋ぐ観念的な媒介者として存立しているにもかかわらず、その固有の

位相は決して明確には表示されないのである。つまり、物化が隠蔽する当の事態とは、関係が自立化し思考物が諸個人を結ぶ媒辞となっている事態なのであり、さらにそれが隠蔽されてくるのは思考物の自立的存立が不可視的であり、可視的な物ののみが現出してくる点にあるといえる。この点を説明することこそ、物象化構造分析の核心である。そしてこのような物象化という事態が生ずるのは、一方で経済的カテゴリ自身のもつ特質(質料的契機¹の存在)と他方でカテゴリの自立化という事態の特質(不可視的性格)が合体するからであり、また両者が合体するのは近代において社会的質料代謝の成立と社会的諸関係の自立化が同時的過程であったことに根拠をもつ。経済的カテゴリは、転倒を再転倒することによって転倒そのものを表面的に理解させる必然性を自身のあり方の内にもつており、したがって経済的カテゴリの特殊性、物象化固有の隠蔽的役割を明らかにするためには、カテゴリの一般的あり方がそれ自体として問題とされることが不可欠なのである。

第五節 商品・貨幣の物象化構造

このように、物象化とは自立化した関係の物象化である。ここから、物象化構造の把握は関係の自立化構造に基礎づけられるという重要な結論を導き出すことができる。換言すれば、貨幣、資本などの物象化諸形態の背後には自立化した関係の構造的な諸契機が存在しているのである。このことをマルクスの叙述に即して跡づけていく課題が残されているが、本稿では紙幅の関係上、商品・貨幣論レベルにとりあえず限定して検討することとしたい。マルクスは『資本論』の商品の物神性を論じていく箇所では諸個人の関係が二つのモメントをもつことを確認する。「第一に彼らの、関係は実際に存在している。しかし、彼らは人間なのだから彼らの関係は彼らにとつての、関係として存在している (Ihr Verhältnis als Verhältnis für sie da)。それが彼らにとつて (für sie) 存在している仕方、言い換えればそれが彼らの頭脳の中で自己反省している (sich reflektieren) 仕方は、この関係そのものの性質から生ずる」(K. erste A., S. 38)。この二つの契機は先に考察した関係行為する諸個人とは区別された関係それ自体の契機と自己関係の契機に対応するものである。マルクスはこの二契機を区別すること

商品と貨幣の物象としての独自の位相を確定するための基本視点を与えている。すなわち商品と貨幣は物象という転倒的なレベルにおいて両契機を表現しているのである。貨幣は自立化した関係それ自体、つまりカテゴリが物化している極であり、商品はそのカテゴリに自己を関係づける契機の物化の極である。前者においては、商品関係という自立化した関係それ自体である価値というカテゴリが表現され、諸個人は無意識ではあるが「価値抽象」を介して他者と関係し商品交換を行うことができる(第一の転倒)。ところがそのカテゴリは一定の物と不可分に一体化し、物化して存在しており、価値カテゴリが直接手に取ることのできる物として現象している(第二の転倒)。それに対して、商品は自立化した自己関係の物化であるが、ここでは貨幣に自己が関係づけられており、自己関係が自立的に存立している(第一の転倒)。そしてその貨幣への自己の関係づけが「価格」として物に付着して存在している。貨幣という他の物の一定量が自己内反映している物が商品なのである。一定のカテゴリへ自己を関係づけるという観念的な契機が、物化して存在している(第二の転倒)。自立

化した関係それ自体を表現する極が「等価物」であり、それが「客観的な固定性と一般的な社会的妥当性」(P. O., S. 782)を得るとき「一般的等価物」として貨幣である。他方、関係それ自体へと自己関係する極が「相對的価値形態」であり、貨幣形態に対応するのが「價格形態」といえる。ここで留意すべきことは、マルクスの構想において、関係の自立化構造という固有のレベルは決して直接的には叙述されず、それ自身物化することで隠されるという現実の事態に即応して、隠蔽された形態でのみ叙述も進められていく点である。一方で自立化していた関係が物として存在し現象する限り、他方で自己関係する契機も物としてのみ自立的に存在するのである。たとえばマルクスは自己関係の極の物化たる「商品」の極と関係それ自体の物化たる等価物の位置を占める「他の商品」の極との相互前提的関連を次のように述べている。「どんな商品も、等価物として、自己自身に、関係することはできないのであり、……商品は自己を等価物として、他の商品に関係させなければならぬのである」(K. I. S. 71)。価値は、前述のようにカテゴリー一般には解消されえず、質料代謝を伴う経済的関係の表現とし

て独自の契機を持つ。一面では特定の関係の表現として「価値抽象」としてのみ確定されるが、他面ではそのカテゴリーが物(質料)の内に存在しているのである。価値カテゴリーはこのように自立化した関係の契機(形態)と物という契機(質料)の統一において捉えうる。⁽¹⁶⁾

このとき自立化した関係の二つの契機(形態の二契機)、思考物の契機と自己関係の契機は、両者とも観念的性格をもちつつそれぞれ物(質料)と統一して自立的に存在する。しかし、各々の物化の仕方、物との統一の仕方は同一ではない。思考物の自立的存立を表現する貨幣では、カテゴリーと物とが直接に一体化しカテゴリーが可視的に存在している。それに対し商品では自己を貨幣に関係づけるという観念的性格が價格として保持されたまま、商品それだけでみればその商品の現物形態、感覚的存在とは違ったものとして付着している。⁽¹⁷⁾

思考物と自己関係の二契機は、物象化によって隠蔽されつつも関係の自立化構造の基本契機であり、マルクスの叙述もこの枠組みに根本的に規定されている。この二契機の区別と関連の分析課題は『資本論』での「価値形態」論に対応するものである。これまで筆者は新たにこ

の二契機を指摘することに力点を置いてきたので、マルクスの叙述そのものとは逆の順序になってしまったが、「価値形態」論に先行する「価値実体」論の課題はカテゴリーが自立して物と一体化していることの分析にある。それは物によって隠されているカテゴリーの自立的存立を摘出することであり、またカテゴリーが観念的でありながら物という実在的なものとして存在している事態を確定することでもある。「価値形態」論の独自の課題は、その自立化し物化しているカテゴリーと、同時に自立化し物化しながらそれに自己を関係づける契機とを区別しつつ、両者の関連構造を分析する点にある。これら二つの課題こそ商品論の論理的骨格をなすものである。⁽¹⁸⁾

価値の実体規定においては、価値という社会的関係が物の内に存在している点が分析され、自己関係の契機は捨象される。関係、それ自体がそれだけで「孤立的に」(K. I. S. 75) 考察されるのである。その核心は、物の内における関係それ自体つまりカテゴリーの抽出が、価値実体たる抽象的人間労働の確定に帰結する、その論理を明確化する点にある。すなわち、関係それ自体は思考によって確定されるものであったが、ここでは、カテゴ

リーが物化するという固有の事態のためにカテゴリーの抽出は同時にそれと一体化している一定の物の抽象化を伴うことになり、したがってそれは具体的な物の感覚的性状・使用価値を捨象することになる。その結果「商品体に残るのは単に労働生産物という屬性だけである。」(K. I. S. 52)そしてさらに、労働生産物の有用性の捨象は、同時に労働の有用性の捨象でもある。「労働生産物の有用性と共に……労働の有用性は消失し……抽象的人間労働に還元される」(p. 50)。こうして、物と一体化した関係それ自体⇨カテゴリーの抽出(価値抽象)は抽象的人間労働の確定に帰結するのである。他面からみれば、この分析は「抽象的対象性」の分析ともいえる。「それ自身抽象的であってそれ以外の質も内容もない人間労働の対象性は必然的に抽象的な対象性でもあり、一つの思考物(Gedankending)である」(K. erste A. S. 17)。カテゴリーの内属する対象物からカテゴリーを抽出することは、対象物それ自身を思考物とせざるをえないのである。

こうしてカテゴリーの物化している事態を一通り分析したのち、マルクスはカテゴリーに自己を関係づける契

機（自己反省の契機）を捨象していた価値の実体分析の限界性について次のように言及して価値形態へ叙述を移行させる。「リンネルの生産においては一定量の人間労働力が支出されて存在している。リンネルの価値は、こうして支出されている労働の単なる对象的反省（der bloss gegenständliche Reflex）にすぎない。その価値は物体の内での自己反省（*sich reflektieren*）ではない」（a. a. O.）。この文の理解で重要な点は、第一に「反省・反映（Reflex）」の語義、第二に「反省」と「自己反省」との区別にある。ここでいう「对象的反省」とは前述の「抽象的対象性」と同義であり、関係を表現する思考物が対象の内に存在し、したがって対象の内へ反映していることを意味している。同時に、それが反省という思考活動によってのみ捉えうるものが重ねて意味されている。Reflexにはこのような二重の意味が与えられており、どちらにしても対象の内へ関係それ自体が存在していることを指示している。それに対し、「自己反省」とは既述の対概念・自己関係の契機を指している。反省と自己反省は相互に不可分であるが、理論上区別しうるものである。マルクスがここでそのような理論的区

別を必要としたのは、価値の実体分析では対象の内からカテゴリーを抽出することだけが課題であって、抽出されたカテゴリーに自己を関係づける契機及び両契機の関連については分析されず、その意味で「単なる对象的反省にすぎず」制約されていることを明確に小括し、かつそのことによって次のもう一つの課題、カテゴリーと自己関係（自己反省）の関連の分析へと考察を移行させるためなのである。これが、価値形態論の主題である。そこで分析が、所述の二つの極を区別することを始点として叙述が進められる所以である。別言すれば、自己関係の契機の叙述進展への導入は一面では関係づけられるべきカテゴリーの抽出・確定（価値実体分析）を前提としており、他面ではその契機の導入は直ちにもう一つの契機との区別と関連如何という固有の分析テーマの存在を照射し、そこへと議論を移行ならしめる役割を果たすのである。

以上、物象化構造の解明は関係の自立化構造の把握を方法的に前提とすることをマルクスの叙述に即して検討してきた。紙幅の関係上要点のみを記しており、また資本の物象性については言及できなかった。稿を改めて考

察したい。

第六節 小括

マルクスの経済的カテゴリー批判の方法は、自立化した関係の表現たる思考物の自立化という近代に固有な思考物の形態性への批判的見地を前提として（思考物・カテゴリー批判のレベル）さらにそこからその自立化した觀念的な思考物が感性的な物として存在することでその自立の本質が隠蔽される物象化構造の解明（経済的カテゴリー批判のレベル）へと、批判を貫徹した点にその核心を見出すことができる。思想史上においてはマルクスの方法におけるこのような二重の批判は、一方で青年ヘーゲル派、ブルードン等の諸イデオログの思考物・カテゴリー一般に対する無批判的態度へ矛先を向けつつ、他方ではカテゴリーが物と一体化して存在しているという経済的カテゴリー特有の物象性を概念的に把握できない古典派経済学と対決する中から形成されてきたものといえる。

同時にマルクスをしてこのような方法的立場をとらしめた深奥の根拠は近代プロレタリアートの客観的位置に

あった。⁽²⁰⁾ 一九世紀近代市民社会において労働者は単に「形式的に人格として」(Gr. S. 211) その構成員であり、実質的にはそこから排除され、国家においても同様であった。労働者には諸カテゴリーによる自己表現、カテゴリー操作による自己の普遍化など、自立化した諸関係を担いその圏域でイニシアティブを發揮する能力を奪われていたといえる。市民社会と国家の両圏から排除され、その外部に位置せざるをえなかった近代プロレタリアートの存在位置が、逆に近代社会の歴史的構造を総体として捉え返すことを要請したといえる。マルクスのカテゴリー批判とは、自立的に存在する関係領域全体に対する批判であり、近代プロレタリアートの客観的立場を理論的に反映したものと見えよう。同時にそれは経済的カテゴリー批判として結実するマルクスの方法的起点をなすものであり、その理論的含意を汲み取ることは単にマルクス研究にとどまらず、市民社会の機能様式を分析していくための不可欠の前提をなすといえる。

(1) 本稿ではマルクスからの引用は Marx Engels Werke

—MEW— 等通常の略号を用いた。但し『ドイツ・イデオ

ロギー』は第一章に限り、廣松渉編河出書房新社版を用い

D)、また『資本論』初版→K. erste A.とそれぞれ略記し、『要綱』は新メガ版を用い、全文献とも原文頁を記した。

引用文中の強調はすべて筆者のものである。

(2) マルクスの方法論を『要綱』「序説」の「経済学の方法」に還元する謬見に対しては既に平田清明氏（『経済学批判への方法序説』一〇一六頁）平子友長氏（『唯物論』八号汐文社一九七七年一月所収論文）などによる批判がある。しかしそれらも「発生史的方法」「上向法」等の方法的諸規定の全体像を提示しているわけではない。本稿において筆者はマルクス方法論解明の予備的前提がカテゴリーの形態性、関係の自立化構造の把握にあることを主張するものである。なお筆者と立場は異なるが、経済的カテゴリー批判の含意を引き出すものとして、Materialien zur Rekonstruktion der Marxschen Werttheorie, Hans-Georg Backhaus, Gesellschaft 1, 3, 11『具体的なものの弁証法』カレル・コシーク、花崎皋平訳（せりか書房）などがある。

(3) ルカーチ『歴史と階級意識』以降廣松渉氏にいたるまで、マルクス物象化論を巡る諸解釈が存在しているがそれらの本格的検討はここでは行えない。さしあたり、「関係の自立化」構造の考究がなされていない点を諸見解に共通する問題点として指摘できる。たとえば、廣松渉氏の「物象化の構制」論（『思想』一九八三年三月号所収論文）においてはカテゴリーの形態性、自己関係などの理解が欠落

している。また氏はマルクスの人格概念を「関係規定態」（同四頁）と把握する点では、従来のマルクス人格論解釈を抜kindる地平にあり、筆者の理解とも少なからず符合するところではあるが、それも関係の自立化という市民社会的転倒の問題性からは把握されていない点を指摘できる。稿を改めて述べさせて頂く。注（14）（15）参照。

(4) 同様の指摘は MEGA IIAB, Bd. 3, S. 221 にも見出せる。

(5) カテゴリー・理念・概念・原理などの思考物としての同一性については本稿での諸引用の他 MEW, Bd. 4, S. 552f.も参照のこと。これらの区別についてマルクスは明示していない。彼にとって問題であったのは、人間の関係はそうした観念的形態ではじめて表現されるということにあったといえる。

(6) ここからマルクス言語論の基本点を読み取ることができる。近代市民社会における言語的疎外は言語の自立化という点にあり、それは関係の自立化という事態との関連で把握されるべきである。尾関周二氏は、『言語と人間』（大月書店）において市民社会における言語的疎外を「ウツをつく可能性」（一八六頁）として単純化して理解しているように思われる。氏においては、言語が諸個人の意識を支配してしまうという事態の転倒性とその固有性において捉えられていない。また竹内成明氏も上述のマルクスの「関係」論的視角を明確化していない（言語における

〔疎外〕と〔物象化〕の問題』『思想』一九七二年二月)。なお、別の論点ではあるがマルクスの言語論には市民社会の領域における諸個人の実践を言語・言述(ディスクール)の自立的媒介性において把握する含意がある。

(7) このような自立化構造の諸局面の分析は『ドイツ・イデオロギー』青年ヘーゲル派批判の叙述の中に明瞭に指摘できる(D. S. 72f.)。紙幅上、詳論できないがそこでは「人格(Person)」と「個体・個人(Individuum)」が概念的に区別され、自立化した関係の担い手が人格として把握されている。個体は「経験的(empirisch)」「質料的(material)」な規定態にあるものとして述べられている。関係の自立化とは同時に「個体」↓「人格」への主体の変容過程と即応しており、またその過程においては思考、概念などの契機が媒介的意義をもつことが指摘されている。なお、注(14)参照のこと。

(8) 近代哲学史はマルクスのこのような観点から検討されるべきであり、また従来の認識理論におけるカテゴリー論も発展されるべきである。なお、注(9)(10)(13)参照。

(9) 関係のあり方を探究することは同時にカテゴリー抽象のあり方を研究することを意味する。マルクスは『要綱』『序説』『経済学の方法』においてかかる観点から二重の分析を遂行する。すなわち、一方で諸個人の関係のあり方という観点からその近代的特質を確定する。それはまず第一に上述のように普遍的諸関係の成立の内に見出され、同時

にまた多様な組織(関係)としても捉えられる。「ブルジョア社会は最も発展した、また最も多様な、生産の組織である。」(Gr. S. 22)他方、翻ってマルクスはカテゴリー抽象の特徴という観点から「最も普遍的な抽象は……最も具体的な発展の下でのみ成立する。」(Gr. S. 38)と指摘する。ここでいう「具体的な発展」とは、別の個所で「具体的なものは、……多様なものの統一であるからこそ具体的なのである。」(Gr. S. 38)と把握されることから「多様なもの」の発展を指しているといえる。同時にそこでは「具体的」なものが「具体的」であるのは、他方で「普遍性」による「総括」があることと相即しているという含意が読み取れる。ここから「関係のあり方——カテゴリー抽象のあり方」という二重の視点からなる分析が統一されてくる。すなわち、一方で「普遍的関係の成立——多様な関係の成立」という関連は、他方で「普遍的抽象——多様なもの」という関連と対応して把握される。マルクスはこのような観点から「労働」概念を分析している。(Vgl. Gr. 38f.)なおカテゴリー抽象の歴史的規定性の問題について付言すれば、あるカテゴリーや理念がどの時代にも妥当する歴史貫通的な性格を持つことと、そのカテゴリーが歴史的に規定されていることとは必ずしも矛盾しない。問題は諸カテゴリーが歴史貫通的な内容を表現するとしても、それ自体という単純性において抽出されてくることにおいて規定されている点にある。ある特定のカテゴリーが問題

とされ普遍的に抽象されてくること自身が、固有のレベルで歴史的規定性を受け取っているのである。「……最も抽象的なカテゴリーでさえも、それが——まさにその抽象のゆえに——どの時代にも妥当するにもかかわらず、このような抽象の規定性そのものの内において、やはり歴史的諸関係の産物なのである……」(Gr. S. 40)。

(10) ここから思考物は近代においては一方で一定の関係を表現し、かつ他方で諸個人を媒介する独自の機能を持つという二重の意義を指摘できる。注(19)参照。

(11) 「一体どこから、彼らの諸関係が彼らに對して自立化することがおこるのか……一言でいえば分業」(D. S. 154)。「分業は物質的労働と精神的労働の分割が現れた瞬間から……現実的分業となる。この瞬間から意識は現存する実践の意識とは別のあるものであるかのような自家像を現実には思い描くことができよう……なる」(D. S. 30)。
イデオログによる「思考物の体系化は分業の一結果」(MEW Bd. 3, S. 432)にはかならないのである。

(12) マルクスのブルードン批判は二重である。第一に経済的カテゴリーの扱いにおいて。「彼はこう問題を提起するだろう。この経済的カテゴリーの良い面を保存して悪い面を除去せよ」と」(MEW Bd. 4, S. 131 f.)。マルクスはこれを単純流通レベルの諸カテゴリーの温存を図るものとして批判する。第二マルクスはにそのような経済的カテゴリーの恣意的扱い方がカテゴリー一般に對する無批判的姿勢

に起因することを抉り出す。「彼(ブルードン)にとつては諸カテゴリーが起動力なのだ……」(ibid. S. 555 f.)。ここにカテゴリー一般を問題とする固有のレベルが見出せる。

(13) マルクスの「自己関係」「反省」「自我性」等の概念はヘーゲルとの継承関係という点から検討されるべきである。たとえば『論理学』は経験的世界から自立化した思考諸規定をそれ自体として純粹に考察することを課題としており、そこでヘーゲルは自立化した思考規定が一つの体系的な構造として存在し、しかもそれが自我ないし人格において担われることで自己運動する事態を考察していると考えられる。またヘーゲルは近代における哲学史の発展を総括してその核心を自己意識についての概念的把握の発展として捉えてくる (Vgl. Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie Suhrkamp Bd. 20, S. 458)。近代哲学の最重要課題の一つは、自我論でありカテゴリー論であるといえるが、それは近代における諸関係の普遍的自立化という事態に直面して、かかる事態の把握とそれを担うべき主体の形成を目指した市民的努力の理論的反映と言えるであろう。近代的市民の成立、その活動圏としての市民社会の成立とは、このような自立化した諸関係の成立及びその担い手たる自己意識をもった諸個人の確立と表裏一体の事態といえる。紙幅の関係上、別稿で検討したいが、ヘーゲル哲学は近代の社会的諸関係の普遍的自立化という事態の表現である思考物の自己運動の解明を目指したがゆえに、その転倒

の枠内に身を置きつつも、マルクスとの方法的連続を可能ならしめたと考えられる。またカントが『純粹理性批判』で自己意識とカテゴリーとの密接な関連について再三言及しているのもこの問題性と連関しているといえる。

(14) マルクスの人格概念は、所有概念、法的人格概念の解明及びカント、ヘーゲルのそれと密接に関連しており、その本格的検討は多岐にわたる論点を包含せざるをえない。その際、最も基礎的な問題は注(7)で触れたようにマルクスが「人格」と「個人・個体」を理論的に区別している点である。この視点は『要綱』段階でも保持されている。たとえば次の箇所。「呼吸する諸個人(Individuen)」として彼らは自然体としてのみ相互に関連し合っているのだから、諸人格(Personen)として関連し合っているのではない(Gr. S. 166)。但し、両者の区別それ自体を問題としない箇所では両タームは同義的に使用される場合もある。

が、その場合でも、根底には市民社会において諸個人は自己意識を媒介として(第三節参照)はじめて人格たりうるという固有の事態が存在しているのであって、かかる事態が両者の同一性の面から把握された結果、同義的に使われたといえる。マルクスのこうした二重の語用自体、個人・個体と人格の同一性と区別性をそれぞれ反映しているものといえよう。マルクスの人格概念の検討は別に行いたい。

(15) マルクスの物象化論とは所有関係の物象化として把握されるべきであり、所有概念の解明が不可欠である。また、

物象化を現象形態としてのみ理解する見解が支配的であるがマルクスは常に「存在(sein)」と「現象(erscheinen)」の統一として把握している。(Vgl. K. erste A. S. 38)これらの論点については本稿では紙幅上捨象して考察している。なお、筆者は「物化(Verdinglichung)」と「物象化(Versachlichung)」の理論的区別を留保しており、本稿では同義的に使用している。

(16) 統一の仕方は商品レベルと資本レベルとは区別されるが、詳説できな。

(17) Vgl. K. erste A., S. 774f.

(18) 価値表現の「回り道」を巡って諸解釈があるが、それも自立化した関係の構造分析の観点からなされるべきである。既に初期マルクスは、神や国家が諸個人から自立した関係であることを述べながら、その自立した関係を媒介として他者と関係する近代的な諸個人のあり方を分析し、そこにおいては「回り道」の構造が不可避なることを指摘している。また自立した関係領域たる国家における政治的行為は自己意識的活動となることもあわせて指摘している(Vgl. MEW Bd. I, S. 353, S. 369)。「回り道」とは媒介項の自立的存立とそこへ自己を関係づける市民的諸個人のあり方を総括的に特徴づけたものといえる。それは関係の自立化構造の把握によってのみ理解しうるものである。また、価値形態論と交換過程論の理論的課題の違いも関係の自立化構造の把握が前提とされる。その核心は自立化した

關係の担い手たる人格の「意志行為 (Willensakt)」の契機が捨象されるか否かにあり、しかもそのような叙述進行が方法上不可避とされるのは分析対象である商品・貨弊レベル固有の物象化構造によって内在的に規定されているがためである。その他詳述すべき多くの論点があるが、紙幅の關係上別の機会に譲りたい。

(19) 抽象的人間労働の概念を巡る論争も、近代における思考物の二重の性格(注(10)参照)を明確化することが前提とされるべきである。すなわち、人間と自然の關係を表現するものとして労働は歴史貫通的であるが、そのカテゴリーそれぞれ自体が一つの自立した機能的意義を持つのは歴史的なのである。詳細は別稿で検討する。

(20) 市民社会とプロレタリアートの位置關係については後藤道夫氏「政治・文化能力の陶冶と社会主義」、『現代のた

めの哲学』第二卷所収青木書店)から学んだ。

(21) マルクスはカテゴリーの機能様式に着目することでカテゴリー抽象の歴史的規定性を批判的に把握し(第二節参照)、同時にそのカテゴリー体系に内在することでカテゴリー構造の運動の中から構造自身をのりこえる否定的モメントの析出を企図したといえる。が、その際構造を内在的に超出しようとして歴史の論理的再構成的把握(たとえば『要綱』の「諸形態」)を行い、それによって構造の自己否定的傾向を基礎づけようとしたと考えられる。ここから、一方でカテゴリー抽象の歴史的形態性を確定しつつ、他方で歴史をカテゴリー抽象の歴史的形態性を確定しつつ、他方で歴史をマルクスにおいて生ずると思われるが、この点の立ち入った検討は省略する。

(一橋大学大学院博士課程)